

目的 第2報で、認知の差の大きいことは情緒の不安定につながるとの仮説を立て、第1報であげた愛情が満たされた経験とは、親子間の認知の差の少ない経験であることと確認した。更に一般家庭を対象に調べた結果、環境の好ましくない家庭ほど、認知の差の大きい傾向のあることと認めた。今回は、第2報で行った一般家庭と、欠損家庭についての認知の差と比較し、どのような場合に認知の差が生じやすいかを見出すことにした。

方法 (1)一般家庭と欠損家庭の親子間の8項目について、認知の差を比較する。

(2)上記の家庭の子供たちにSCTを行う。

(3)上記の家庭より、それぞれ好ましい親子関係、好ましくない親子関係の2組ずつを取りあげて、インタビューを行う。

結果 以上の調査により、義父母のいる欠損家庭にも、親子関係の好ましい家庭があり、また両親の揃っている一般家庭には、好ましくない親子関係のあることを見出し、環境は、認知の差の総べてをきめる因子ではないことと認めた。特に今回は、血のつながりのある親子間でも、「安心」による認知の差の大きいのが目立ち、親子間の理解の失われている傾向のあることと認めることが出来た。